



▲ 空港の地下連絡道も完成。この上に滑走路がある。後方に空港ビルが見える。

▼ 空港道路の整備もほぼでき上り。



▼ 赤・青・黄の三色の光で、パイロットに進入指示を教える進入角指示灯の取り付けも終わり、最後の調整が行なわれている



△ここに人あり▽

谷間にともす灯

八代郡泉村下岳
上野 登さん

五家荘（八代郡泉村）といえは、平家の哀話を秘めた史実が数多く残っていて誰でも一度は行ってみたいところ。

ただ、道路事情がよくなつたためにも、峻険な山々は、外界との交流を容易には許さず人々の生活を大きく制約している。とくに、十二月から三月にかけての冬場は、積雪のため孤立することもめずらしくない。いまでも秘境ということばが、ここでは生きてきているのだ。

その山深い五家荘椎原に、泉村へき地診療所がある。この診療所は、昭和三十三年、国立熊本病院の五家荘出張診療所として設置され、三十七年に泉村へ移管された。四十年初めには、医師不足のため国立病院からの医師派遣ができなくなり、病院と村では、同村の下岳の開業医で、へき地医療に理解のある上野（あが）さんに無理をお願いした。上野さんは心よくこれを引受け、四十年四月から正式に診療所の非常勤医師となり、以来五家荘一円のおよそ三百世帯の人々の健康を守っているのである。

少し小柄だが、元氣な上野さんは、個人開業のかたわら、週一回程度、自宅からおおよそ三十キロメートルも離れた椎原へ出かける。いつもは、ベテラン看護婦の村川さんが、電話で上野さんの指示を

受けながら治療に当たっているが、その日は、あらかじめ有線放送で知らせてあるので、たいてい二、三十人の患者さんが、先生の到着を待っている。ほとんどの方が、久連子から、樺木から、葉木から、仁田尾から、一時間も二時間も、けわしい山道を歩いてくるのだ。長時間歩くとかえって病状が悪化するような人もいるのだが「なんさま、先生にみてもらわねば、おてつかんもんですけん」というわけである。だから「やはり往診もできて、いつでもみてやれるように、常駐の先生を捜すことが先決です。そして、これからは、健康増進を図るとか、予防診療にウエイトをおかねば……」という上野さんの意見は関係者に痛切に訴える力をもっている。

ある決意

上野さん（六七）は、明治三十六年、八代市日奈久に生まれた。八代中学から五高、熊本医大へと進んだ上野さんは、卒業と同時に軍医となった。満州の関東軍軍医大佐のとき終戦・ソ連軍に捕われの身となり、マルシャンヌクに二年間抑留され、二十三年に帰国。途中、薬ひとつなく、朝鮮で奥さんが病死するという痛恨のできごとがあった。

傷心の上野さんは、帰国するとすぐ医者がいなくて困っていた泉村下岳に入ることになる。「初めは、しばらくのつもりだったが、後任の先生も見つからず、泉村の人々のためにつくそうと思いなおし、腰をすえる決心をした」のだという。

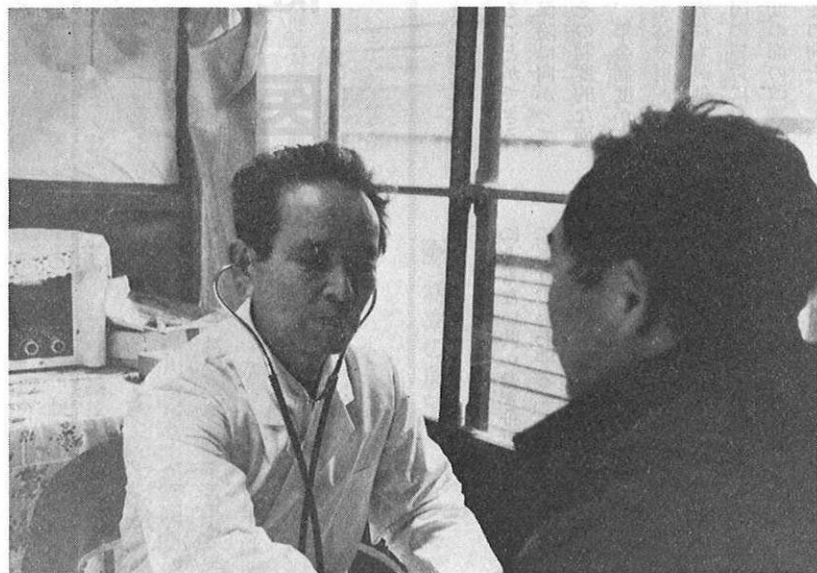
定着する「仁術」と人柄

全国的にみても医師不足で、とくに、へき地の医療ととり組む人は、本当に少ない。

県では、過疎地域対策の一環として、熊本県無医地区巡回診療所をつくって、定期的なへき地の人々の診療に当たっているが、これはその時だけの投薬で終わるという限度がある。だから上野さんは、巡回診療の時は必ずついてまわり、処方箋をチェックする。「巡回診療所とタイアップして事後処置に当らねば効果が少ないから……巡回診療に力添えをしていくわけですよ」とあくまでもひかえめである。

趣味は、盆栽と囲碁のことだが、「患者や家族の人たちと話しあうのが楽しみ」「山道を往診することなど苦勞のうちには入らない」という上野さんを見ると、仕事に興味といった方がいいのかもしれない。

学問的な刺激や医師仲間が少ないことなどへき地ゆえの物足りなさはある。だが、誰かがやらねばという一種の使命感が上野さんを



△診療にあたる上野さん▽

支えるのだ。「住めば都ですよ」とこの地に生涯をささげるつもりである。上野さんは多くを語らない。だが、その実直な人柄と献身的な活動は、村の人たちが一番よく知っているにちがいない。